高根城へのアクセス

交通案内

■JR飯田線利用の場合

東海道本線「豊橋駅」から特急約1時間30分。
水窪（みさくぼ）駅下車、タクシーにて約10分。徒歩約15分で城跡へ至る。向市場（むかいちば）駅下車、徒歩約30分で城跡へ至る。

■車利用の場合

東名高速道路浜松IC、新東名高速道路浜松浜北ICより国道152号線を北上。
中央自動車道飯田ICより国道152号線を南下。いずれも約2時間を要する。山間部に入ると、道が狭くなるため運転に注意。駐車場あり。

【お問い合わせ】
水窪文化会館　TEL.053-982-0013

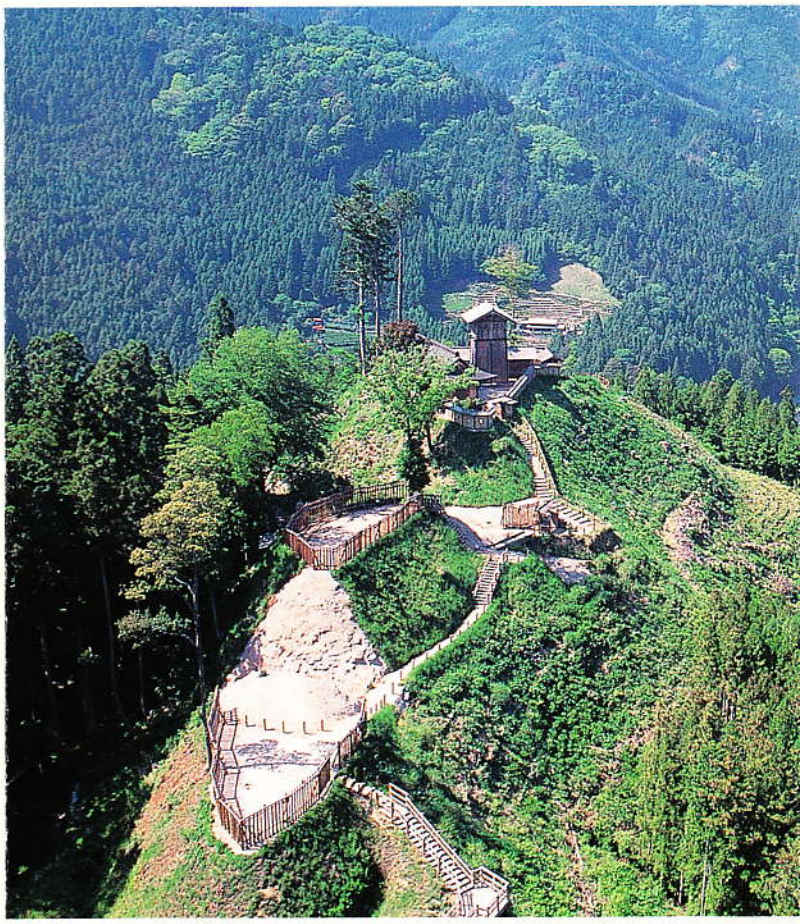
発行／2013.9

浜松市指定史跡

遠江最北端の山城

高根城

（久頭郷城）



浜松市

城の歴史

高根城（久頭郷城）が築かれたのは、発掘調査で出土した遺物から、15世紀前半であることが判明しています。城主は、地元の国人領主奥山氏でした。

永正年間及び大永年間（1521～28）遠江・駿河を支配していた戦国大名・今川氏から土地の支配を認められていたことが、分かっています。奥山氏による水窪町を含めた北遠江支配は、今川氏が没落して武田信玄、徳川家康の力が強まった永禄年間（1558～70）頃に、大きく変わりました。

奥山氏は永禄12年（1569）には、今川氏真・徳川家康という敵対している二人から、領地を認める同じ内容の書付を、さらに元亀3年（1572）には武田信玄からも同様の承認を得ています。おそらく、この頃奥山氏内部で、今川・徳川・武田のどこに味方するかで内部分裂が起こったようです。この分裂の時に、奥山氏の惣領家が滅亡して、武田信玄の味方になったのです。

元亀3年（1572）の武田信玄による遠江侵攻戦の前には、武田方の兵力が駐屯することが可能な番城となっていました。現在見られる城は、元亀元年から天正4年（1570～76）の間に、武田軍の手によって、大きく改修を受けた姿をしています。

武田信玄の跡を継いだ武田勝頼は、天正3年（1575）長篠の戦いで、織田信長と徳川家康の連合軍に敗れてしまいました。勝った徳川家康は、遠江から武田軍を追い出すために、さかんに戦をしかけてきました。負けた武田軍は、二俣城（天竜区二俣町）を取り返され、やがて犬居城（天竜区春野町）も奪われてしまいました。武田軍が遠江から信濃へ追い返されると、高根城は廃城となりました。

高根城は昭和57年（1982）に水窪町史跡に指定され、平成17年（2005）の天竜川・浜名湖地域12市町村の広域合併に伴い浜松市指定史跡に引き継がれました。

発掘調査で出土した遺物の一部は、水窪民俗資料館で展示されています。

城の構造

高根城は、遠江最北端に位置する山城で、標高420メートル・比高150メートルの通称「三角山」の山頂部を中心に築かれています。城跡からは、水窪町の中心部と北遠江と南信濃を結ぶ信州（秋葉）街道（通称「塩の道」）を見下ろすことができます。

城は、この大切な一本のルートを押さえることと、遠江・信濃の国境の警備を固めることを主な目的として築かれたのです。

平成5年（1993）から平成11年（1999）にかけて、城域の全体が発掘調査され、綿密な時代考証を経て、城内の建物等が復元されました。発掘調査では、城内を移動する道の全容が確認されました。何度も折れ曲がり、梯子や橋を利用した複雑な構造をしており、全国的にみても貴重な事例となっています。

城は、北から本曲輪・二の曲輪・三の曲輪という三つの曲輪によって構成されています。中心となる本曲輪は、南北約35メートル・東西約20メートルの広さがあります。東北隅に大手口、東南隅に搦手口が設けられ、西側に土塁も確認されています。本曲輪搦手口の東南下側には、厳重な虎口が設けられ、本曲輪を固めていました。

二の曲輪は、南北約20メートル・東西約7メートルの規模で、本曲輪との間は約10メートル程の堀切状の谷地形により区切られています。二の曲輪へは、下側通路から梯子を利用して上がっていたことが判明しています。

三の曲輪は、南北約20メートル・東西約8メートルと二の曲輪よりわずかに広い曲輪です。二の曲輪との間には、幅約20メートル・深さ約5メートルの堀切が設けられていました。東側端に、本曲輪と三の曲輪を結ぶ土橋が確認されています。

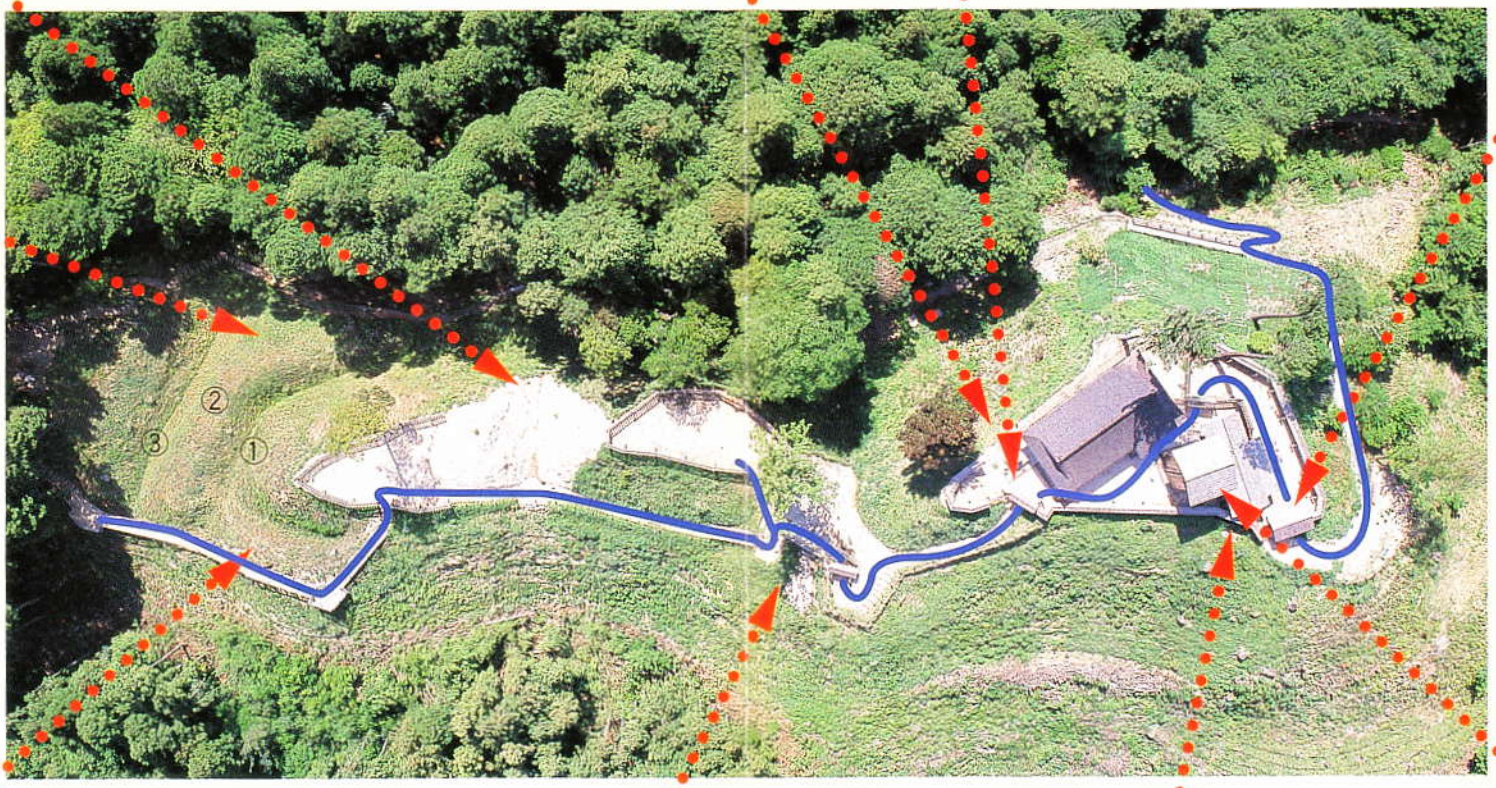
三の曲輪南側には、中央に土塁を挟む二重堀切が配され、ここが城域を区切る最終防御ラインとなっています。三の曲輪側の堀切は、U字状に曲輪を取り囲み、外側の堀切は一直線に尾根を切断しています。この二重堀切の幅は約29メートルで、三の曲輪から内側堀底までの深さは約9メートルと、壮大な規模となっていました。

発掘調査が終了した本曲輪全景

発掘調査によって、礎石建物や城門、井楼櫓の跡や掘立柱建物の跡、柵列などが確認された。

搦手門（からめてもん）

本曲輪の南東端に設けられた搦手門。この門から、本曲輪南下の段を通って、三の曲輪・二の曲輪へ往き来することが出来た。



本曲輪南下の段の虎口

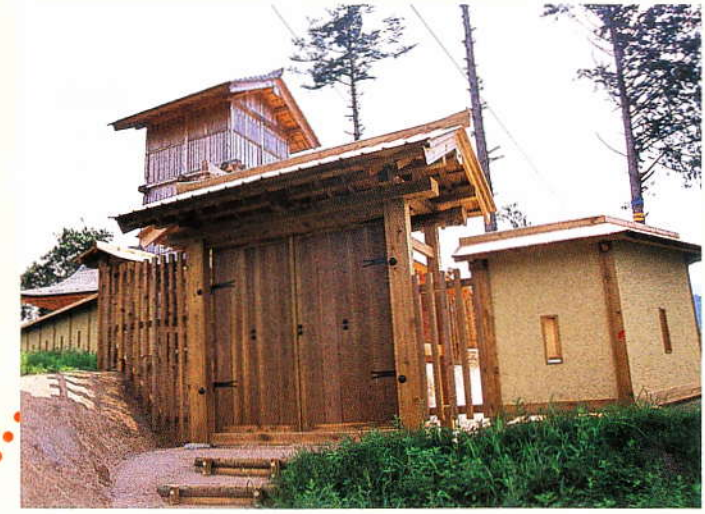
門を設け、柵や木橋によって、三の曲輪方向から敵の襲来に備えた施設である。

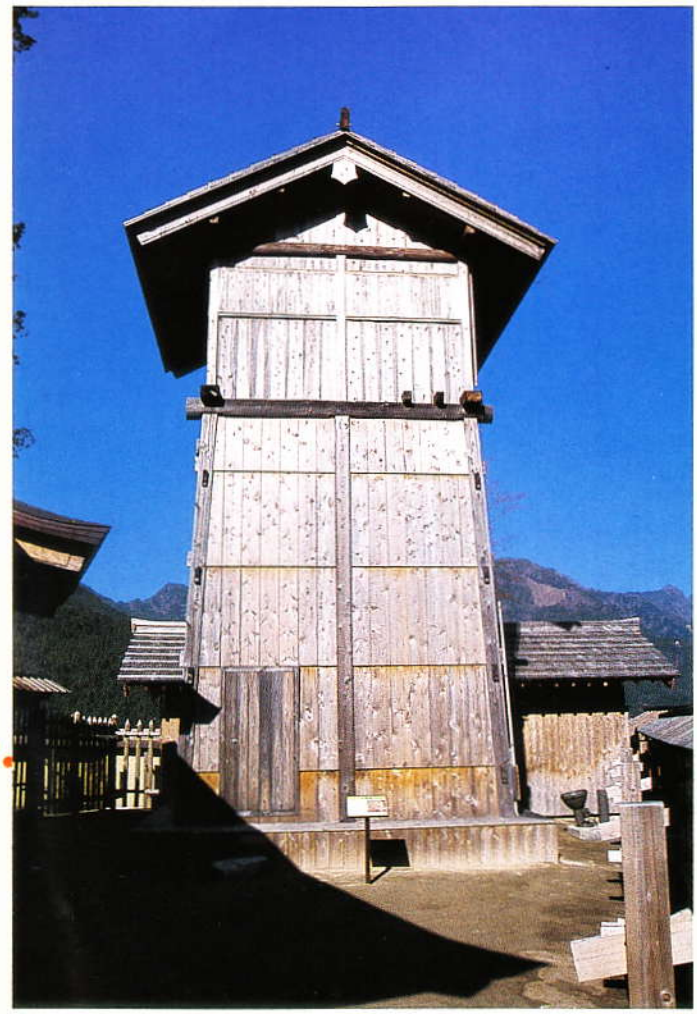
倉庫として利用された礎石建物

1間×4間の建物で、北側に1間分の外屋（げや）が付属している。西側が土間（どま）で、引戸（ひきど）を支える礎石が発掘調査で確認された。

大手門

大手門は、１間半（９尺）×１間の薬医門で、礎石造りであった。発掘調査で確認された他の３城門は、いずれも掘立柱形式で、大手門より３尺小さい。





井楼櫓（せいろうやぐら）

本曲輪の中央部東端に位置する櫓。２間×２間の正方形の建物で、中央部に昇り降りに利用した梯子の痕跡も確認された。内部には、昇降のために、階段が設けられたが、これは見学のための施設である。本来の姿を解りやすくするため、梯子も復元されているが、昇降用ではなく展示施設である。

2号堀

二の曲輪と三の曲輪の間に設けられた堀切。東端に土橋を設け、本曲輪への通路としている。最大幅約11m、二の曲輪から深さ約８ｍ、断面は逆台形の箱堀である。

二重堀切

三の曲輪南側に配された、城内と城外を区切る幅約29ｍの最大の堀切。①北側に三の曲輪を取り囲むＵ字状の堀切　②真ん中に堀底から約５ｍの高さの土塁　③南側に尾根筋を遮断する直線の堀切で、構成されている。

四百年間かけて埋まった、土砂の堆積状況。
本来の堀切は、断面逆三角形を呈す薬研堀（やげんぼり）であった。